

ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.31 2025.8.2

安曇野市制施行20周年記念 戦後80周年記念企画

日中戦争、太平洋戦争下の 安曇野の人々

二人の特攻兵と、一人の女子挺身隊員を追って…



上原良司さん



浅川又之さん



中島良子さん

厚生労働省によれば、先の大戦の兵士や民間の犠牲者数は、あわせて約310万人とされます。安曇野市域出身の犠牲者数は、日中戦争以降が1,681名、なかでも1944・45年の2年間で1,200名を超えます。ここでは、二人の特攻兵と、一人の女子挺身隊員を紹介します。

航空特攻の「特攻」は、特別攻撃隊を略した呼び方で、軍用機に爆弾を搭載してそのまま艦船等に突入する作戦で、操縦者は生きて帰ることはできません。太平洋戦争末期、優勢な米軍の前に敗戦を重ねた日本軍は、航空特攻で反撃を計画します。フィリピン戦で1944年（昭和19）10月に海軍の神風特攻隊が米軍艦船に対して実施したのを皮切りに、陸軍も続けました。本土決戦が近づくと、米軍への反撃の主な手段は特攻だけになります。操縦士は十分な訓練を受けない学徒出陣の飛行予備学生、幹部候補生出身の若者でした。1945年（昭和20）3月に沖縄に米軍が上陸すると、九州各地の飛行場からは特攻隊が出撃しました。鹿児島県知覧基地は最も沖縄本島に近く、陸軍が編成した数多くの特攻隊、振武隊が出撃し、400名以上が亡くなりました。ここでは、その中の安曇野市域出身の旧制中学同期の2名を紹介します。

戦争が本格化すると、働き盛りの男子は戦場へ送られ、続いて中等学校の男子生徒が工場に動員されました。それでも足りず、男性がやっていた仕事を若年女性が担うことになり、14歳から25歳までの未婚女子までもが工場へ動員されることになりました。豊科高等女学校の生徒も1943年（昭和18）から地元で疎開してきた軍需工場に。1944年（昭和19）、卒業直後の一人の女学生は、女子挺身隊員として上諏訪の軍需工場に動員されました。しかし、身体をこわして17歳の誕生日の11日後になくなりました。

どうして、彼ら、彼女たちが、命を落とさなければいけない時代になってしまったのでしょうか。

平和を守り、戦争を二度と繰り返さないためには、戦争の経験を伝えていくことが重要です。本企画によって、改めて先の大戦の悲惨さと平和の大切さを考えていただければ幸いです。

第56振武隊 沖縄への特攻

自由主義に憧れた特攻兵 上原良司

- 1922年（大正11） 北安曇郡池田町に生まれる
 1940年（昭和15） 松本中学校（現松本深志高校）卒業
 1941年 慶応義塾大学予科入学
 1943年 慶應義塾大学繰り上げ卒業 東部50部隊（松本）に入営 21歳
 1944年 2月 陸軍第二期特別操縦見習士官に合格
 熊谷陸軍飛行学校相模教育隊地上教育
 3月 同 基本操縦訓練開始（館林飛行場）
 11月 第40教育飛行隊 分科基本教育操縦訓練（知覧飛行場）
 12月 第11錬成飛行隊 錬成教育開始（目達原飛行場）
 1945年 3月 特攻志願
 4月 常陸教導飛行師団へ転属（目達原から水戸へ移動の際に有明村滞在）
 4月14日 第56振武隊編成（水戸飛行場）その後調布飛行場へ
 5月3日 明野飛行場
 5月4日 海軍岩国飛行場に緊急着陸
 5月6日？ 知覧飛行場
 5月10日夜 「所感」記す
 5月11日朝 6時10分 隊員集合
 6時30分 出撃
 沖縄周辺海上で米艦隊に突入



上原良司
（三式戦闘機「飛燕」の操縦席にて）



1922年（大正11）に北安曇郡七貴村（現池田町）で生まれ、軍医である父の転勤にともなって全国を転勤した後、開院にともない2歳の時に有明村に移り、幼年時代を過ごしました。家庭は、当時としては珍しいカメラを持ち、蓄音機でクラシック音楽を聴き、テニスやスキーなどのスポーツを楽しむ、文化的な環境で育ちました。父の教えは、「嘘をつくな。誰の前でも自分の思うことを述べよ」でした。

1935年（昭和10）に自由な気風に^{あふ}溢れ自治を尊ぶ旧制松本中学校に入学、41年に慶應義塾大学に入学しました。大学時代には、良司は羽仁五郎の『クロウチェ』に出会います。そこでクロウチェの自由主義に感銘し、傾倒することになります。

太平洋戦争の戦況が悪化し兵力が不足すると、大学や高等学校などの文科系学生・生徒の徴兵延期が停止され、1943年（昭和18）10月に、満20歳に達した学生・生徒も兵役に就くことになりました。

良司も、翌年1月に陸軍に入隊。志願して2月に第二期特別操縦見習士官に採用され、熊谷陸軍飛行学校（埼玉県）に入学し、訓練を続けます。その際のメモには、軍隊の非科学的な論理を批判し、軍人精神を唱える者を「愚者」と呼び、その対極に自由の偉大さがあると記しています。1945年（昭和20）3月日達原飛行場（佐賀県）で操縦訓練を終了します。その直後に、特攻の要請を受け志願します。良司は、後に友人に、「死地に赴くのに喜んで志願する者は、誰だっていない。上官が手を挙げざるを得ない状況を作っているのだ」と話したとされます。特攻隊編成のため水戸に向かう途中、最後の帰省、「遺書」を残す。4月14日水戸飛行場で特攻機（三式戦）を受領して、調布・明野飛行場を経由して、5月6日頃に知覧飛行場（鹿児島県）へ到着。5月10日夜『所感』を記し、翌日早朝出撃、沖縄周辺洋上で戦死。

日本の学徒兵の遺書を集めた遺稿集『きけわだつみのこえ』の冒頭に「遺書」、さらに『所感』が紹介されています。自由を尊ぶ自己の信念の正しさを確信するとともに、日本の敗戦を予見しその後の祖国への願いを綴っています。



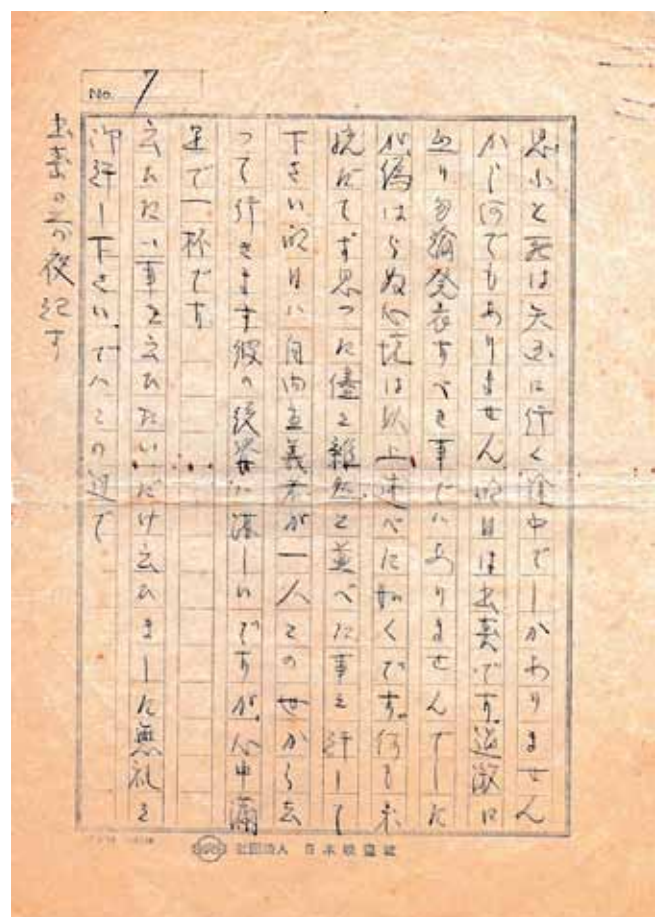
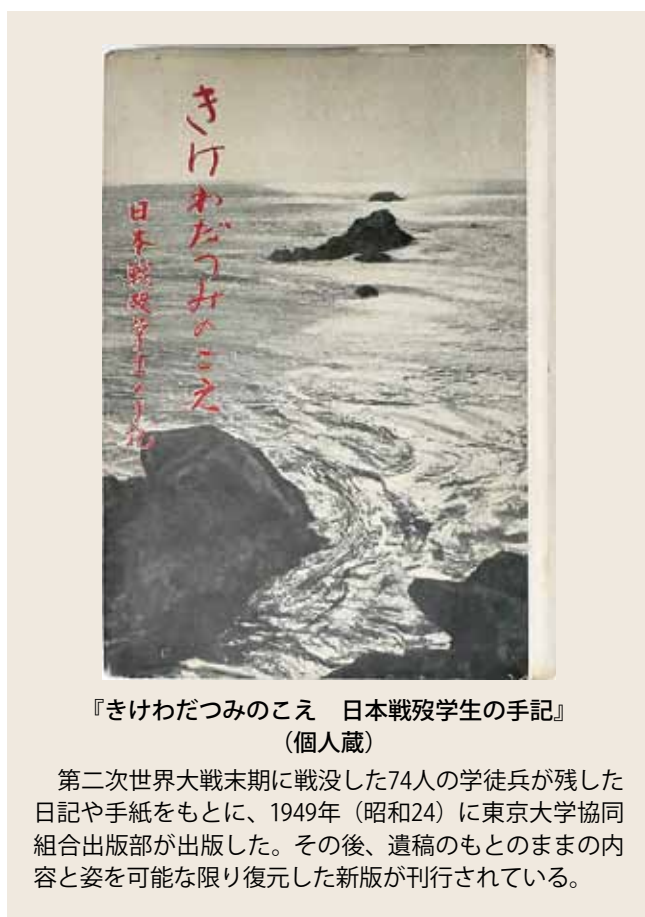
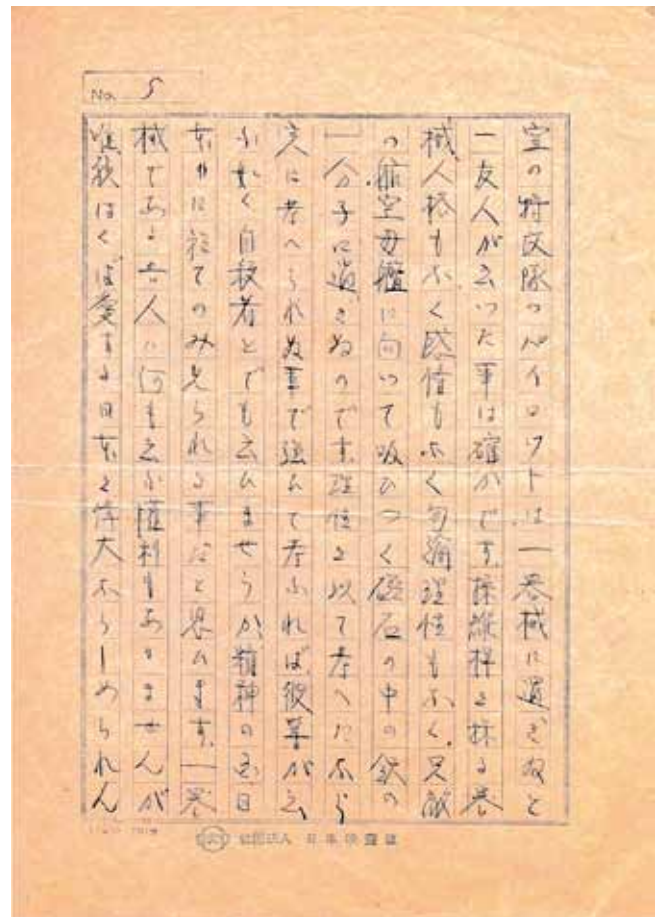
第56振武隊編成（水戸飛行場）



上原良司の愛機三式戦闘機「飛燕」



整備兵が上原搭乗機に泣きながらツツジを飾った
（明野飛行場）





1945年4月 愛機「飛燕」とともに（調布飛行場）



1945年5月10日
出撃前夜の上原良司（右・知覧飛行場）
この後、陸軍報道班員の高木俊朗の求めに応じ、「所感」を書き残した。



1945年5月11日
出撃の朝（6時10分）
愛機の前で「男なら」
を手拍子とともに合唱
6時30分出撃

【上原良司関係の画像】上原幸一氏の所有する画像を使用させていただいた

【上原良司に関して次を参考とした】

長野県立歴史館2015 『長野県民の1945 一疎開・動員体験と上原良司』

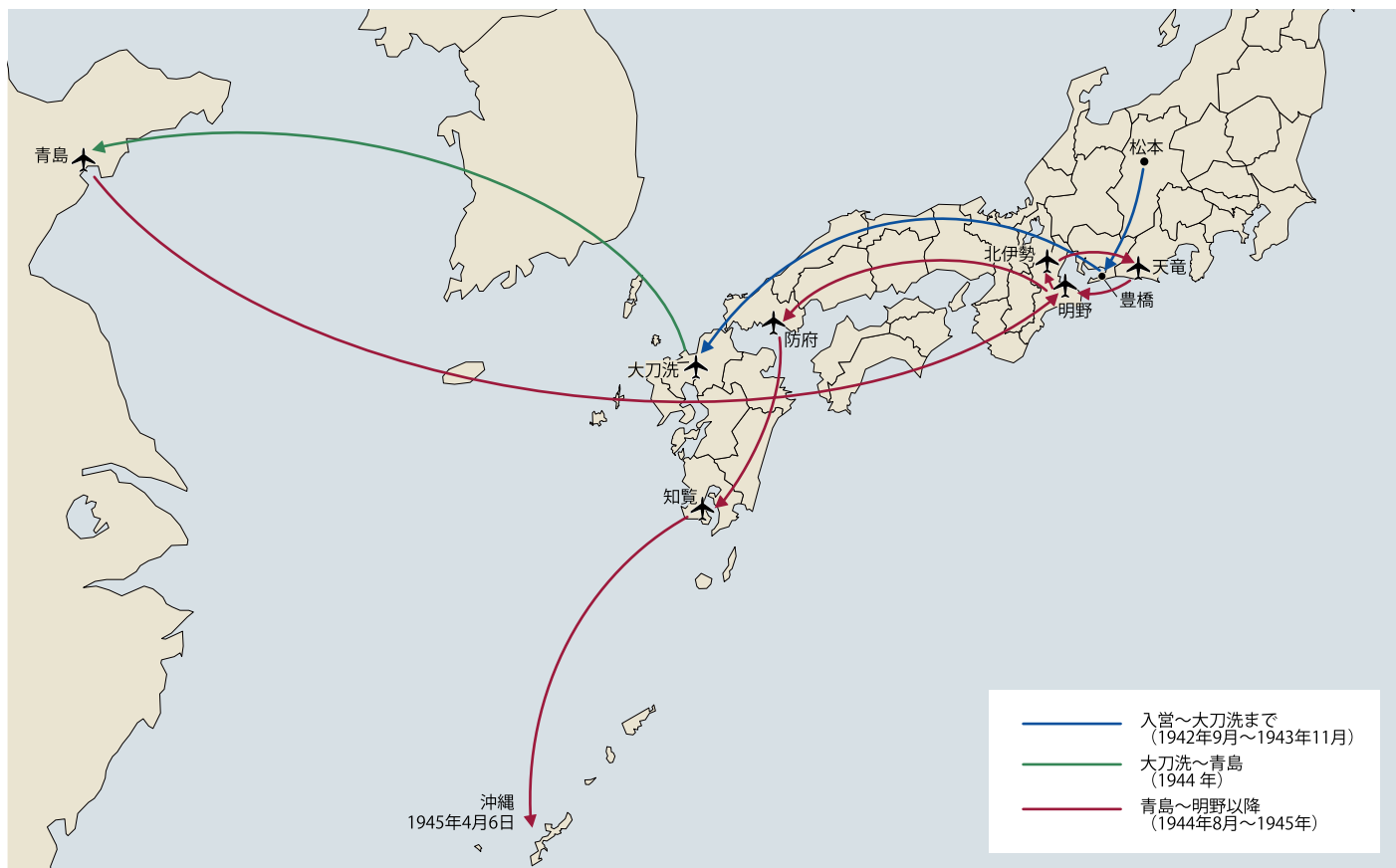
第43振武隊 沖縄への特攻

にっこり笑って出撃 浅川 又之

1922年（大正11）1月6日 烏川村（現堀金）に生まれる。
 1928年（昭和3）堀金小学校入学
 1933年 同 6年 終生慕う担任の清水恒治先生と出会う
 中学不合格そこのモットーは「失敗は成功の母」
 1935年 旧制松本中学校入学 当時珍しい棒高跳びに挑戦
 1940年 東京高等蚕糸専門学校に入学
 1942年5月 父利久太死去
 9月 東京高等蚕糸専門学校繰上卒業
 東部50部隊（松本）に入営 陰惨で厳しい初年兵教育
 1943年2月 甲種幹部候補生に合格（1945年1月）
 5月 豊橋陸軍教導学校（第二陸軍予備士官学校）へ入学
 航空機操縦学生募集に応募 転科試験合格
 11月 大刀洗陸軍飛行学校菊池教育隊へ入学 見習士官
 1944年4月 第29教育部隊 中国青島郊外 陸軍少尉
 8月 明野陸軍飛行部隊
 （9月 北伊勢飛行場 11月 天竜飛行場 12月 明野飛行場）
 11月 特攻志願？ 11月25日 遺髪を入れた遺書実家へ
 1945年2月14日 第43振武隊編成
 3月16日 恩師清水恒治先生へ遺書
 3月17日 電報「メンカイニコイ」
 3月19日 兄新三郎ら鳥羽市で面会
 3月24日 面会のお礼（愛知県豊山村）
 3月31日 防府駅前旅館から2通の手紙
 ～4月3日 知覧基地に到着
 4月6日 15時30分 出撃
 17時45分 沖縄西方海上で米艦隊に突入



一式戦闘機「隼」機上の又之
（1945年1月）

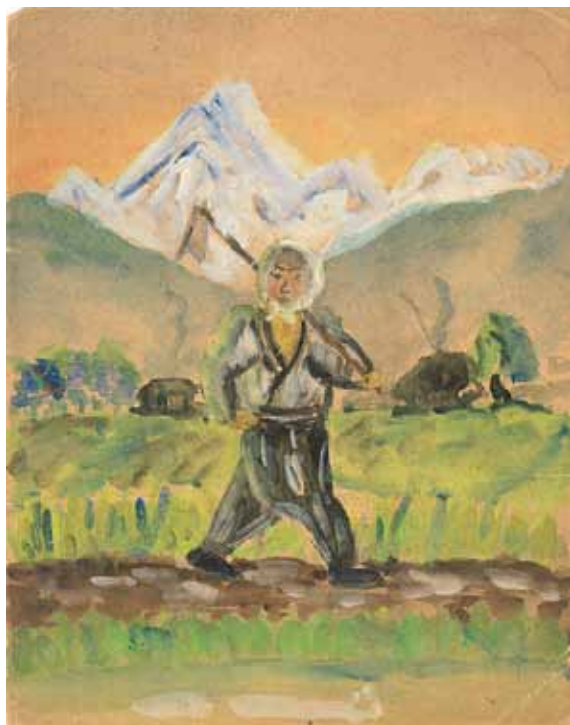


浅川又之は、1922年（大正11）に堀金村の大農家に生まれます。6人兄妹の末っ子、優しい家族にかわいがられて素直に育ちました。松本中学校時代は、陸上競技部に入り、当時珍しい棒高跳びに挑戦。卒業後、実家が養蚕をしていたためか東京高等蚕糸専門学校に進学。剣道、弓道、スポーツは何をやらせても万能、特に馬術部では障害競技に熱中、充実した学生時代を送ります。

1942年（昭和17）10月、繰り上げ卒業、松本の東部50部隊に入営。翌年1月までの厳しい初年兵の訓練が続きました。4月に甲種幹部候補生、重機関銃隊に転属。5月10日に豊橋第二陸軍予備士官学校に入学、航空隊への転科に応募し、合格。11月より大刀洗陸軍飛行学校菊池教育隊に入学、座学から始まります。12月1日より九五式練習機（通称「赤トンボ」）による訓練を開始。1944年（昭和19）1月28日に初の単独離陸に挑戦するが失敗、練習機を破損。2月16日に再度挑戦し成功。日記には「本日ハ感激ノ単独ヲナス」と記しています。3月20日に飛行学校終業、青島郊外の第29教育飛行隊に転属、実戦に近い訓練を実施、7月に課程を修了。8月に明野陸軍飛行部隊に転属、飛行場を移動して一式戦闘機「隼」による実戦訓練が始まる。10月末に「特殊任務に志願するものは各自署名して提出せよ」、特攻への志願が始まります。

又之の日記は11月24日で終わり、翌日に手紙（遺書）とともに荷物を実家に送ってきています。そこには「写真は古を偲ぶ只一つものだ。これから送付するものも失くさぬ様に保存しおかれたし、亦小生の手紙も何かに纏めておいて下さい。」とあり、すでに特攻への志願は終わっていたのでしょうか。

1945年（昭和20）2月に編成された第43振武隊に属し、特攻の訓練が始まる。3月17日に又之から「メンカイニコイ」の電報が実家に。兄妹など四人で、鳥羽市（三重県）に面会に向かいました。3月末沖縄戦開始。3月31日、防府（山口県）から二通の葉書が兄へ。一通は力を込めておおきく「元気で、必ず必ずご期待に沿わん」。出撃の日が決まったのでしょうか。4月1日あるいは3日には知覧に到着し、兄と三人の姉に宛てた遺書をしたためました。4月6日午後3時30分、出撃。エンジン不調の隊長機に代わり、浅川又之が長機となり、沖縄洋上の米艦船に突入。戦死23歳。



浅川又之画「農夫」（松本中学校2年1組）



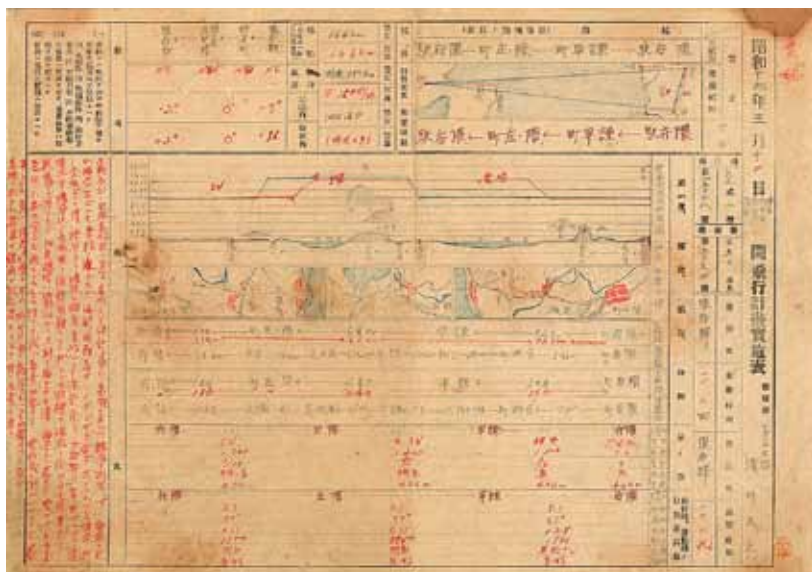
松本中学校堀金会による又之らの送別会
(1940年1月21日)



東部50部隊 機関銃隊記念写真
(1943年2月3日)



大刀洗飛行学校の授業・訓練風景（1944年）



◀ 浅川又之の飛行計画実施表

昭和十九年 3月13日実施の、練習機95式 1 型（通称赤トンボ）による、隈府飛行場から午前11時24分出発し、熊本県から有明海上空を通過し諫早町で折り返し隈ノ庄町を通り隈府飛行場に12時29分に戻った訓練の記録。計画は黒字、実施は朱字で記されている。教官より、多くの所見が記されているが、評価は「良好」とある。

信州の山男と言ふには余りにも優男、業平丹治郎も三舎を避けるとか。而も気は優しくて力持ち。飯は食ふ、棒高、走高の放れ業を持つ彼、酒を飲み興至れば裸で踊り出す。



陸軍大刀洗飛行学校の3区隊第2組（又之は前列左）

同隊の園本不二雄が隊員のプロフィールを記している。左が又之のそれである。「業平」は在原業平、「丹次郎」は色男の代名詞、「三舎を避ける」はおそれて尻込みをするの意味。

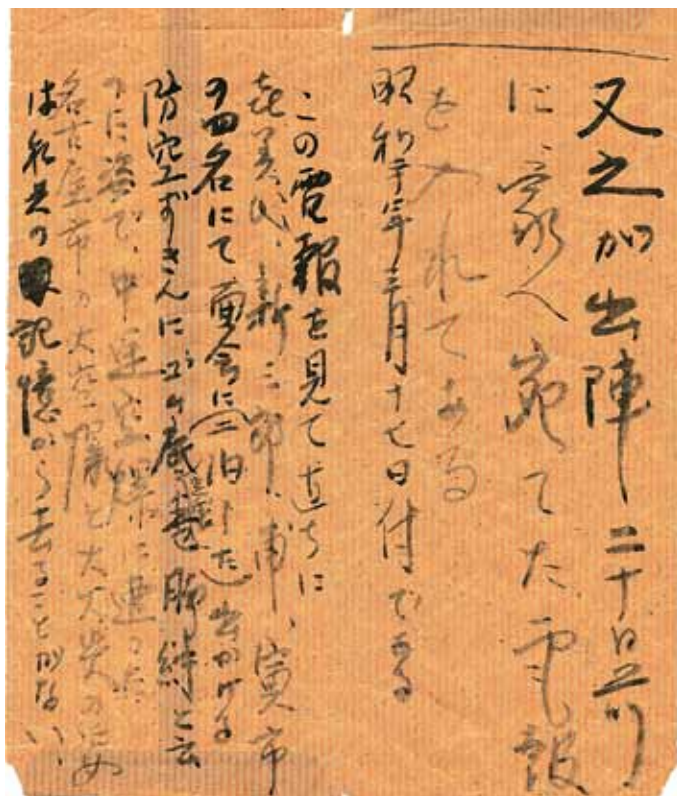


電報

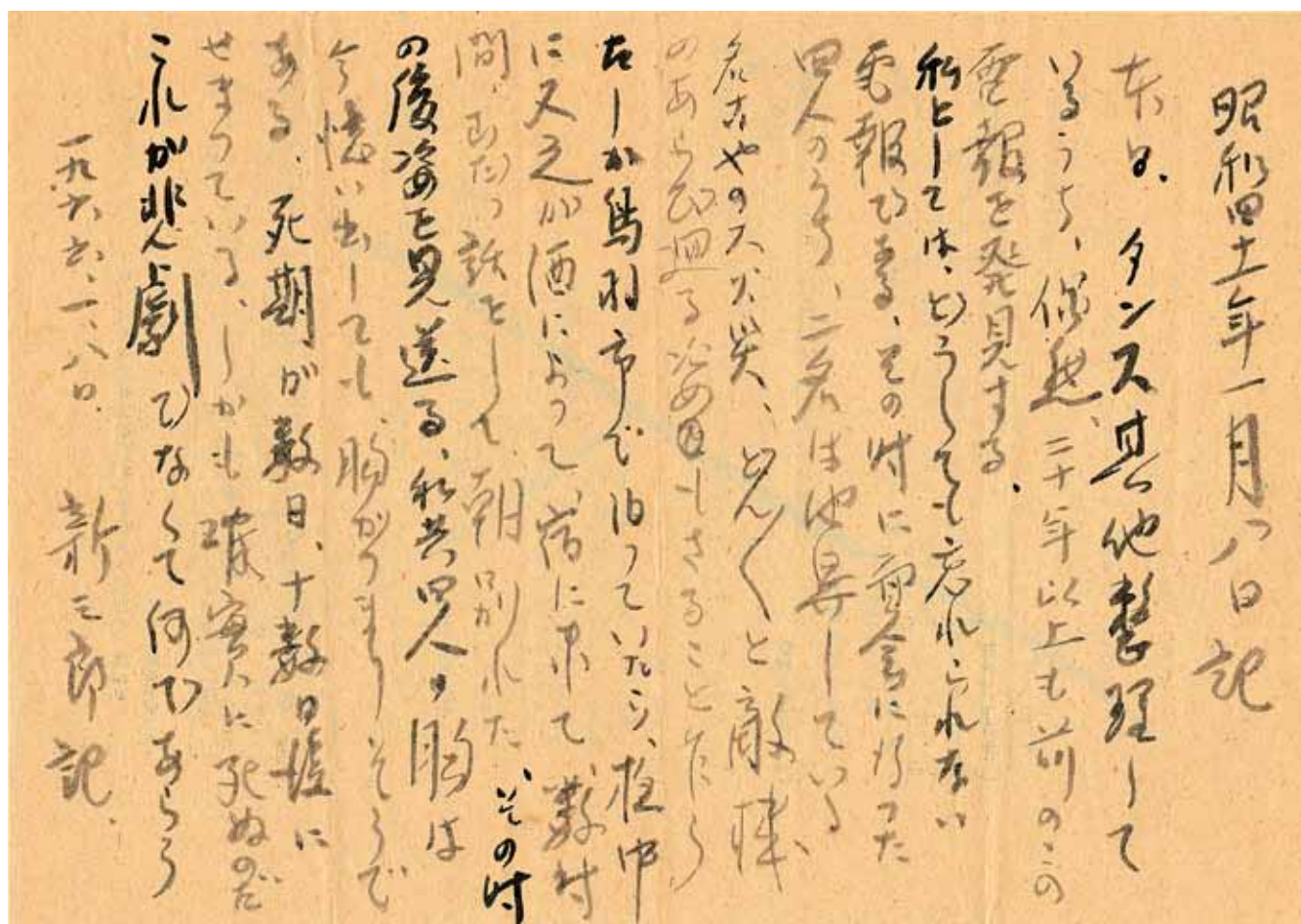
「スズカ カワサキムラニメンカイニコイマタユキ」

1945年3月17日

兄新三郎に宛てて面会に来ることを求めた又之からの電報。又之の出撃日が決まったか。



兄新三郎が電報を入れてしまっておいた封筒
面会に行く際に遭遇した名古屋市中で空襲にあった光景を、
「記憶から去ることはない」と記してある。



昭和四十一年一月八日記 新三郎記

兄新三郎が又之が戦死して20年以上経って、電報を見つけた際のメモ。電報を見て、又之に面会に行った様子が記される。最後に「死期が数日、十数日後にせまっている しかも確実に死ぬのだ これが悲劇でなくて何であろう」と結んでいる。

予定には未だこちらに居るが、戦局
急に変に中絶に付、
手紙は出さぬ事、所定は、落着く
から出さぬと思つて居ります。折あるは宜しく
御返願をします
長子姉妹は御返願を、御返願と、御返願は
甚だしいつて、所定を知らせす、大至急送附
下す

先日は、御面会に、未だ、有難
御座ります。性一の為、何やかやと、
り、世に、亦、顔と面と向ふと、話
事、口に出さず、何やら、合点の中、ぬ
持、此、一、貴、死生観には、
無、元氣旺盛にて、出、致、します。

兄新三郎宛の 又之からの面会のお礼

…「亦顔と面と向ふと話し^たい
事迄口に出さず何やら合点のゆか
め気持ちでした。然し一貫した
死生観には変わり無く、元氣旺
盛にて出発致します」…との手
紙が送られた荷物に入っていた。

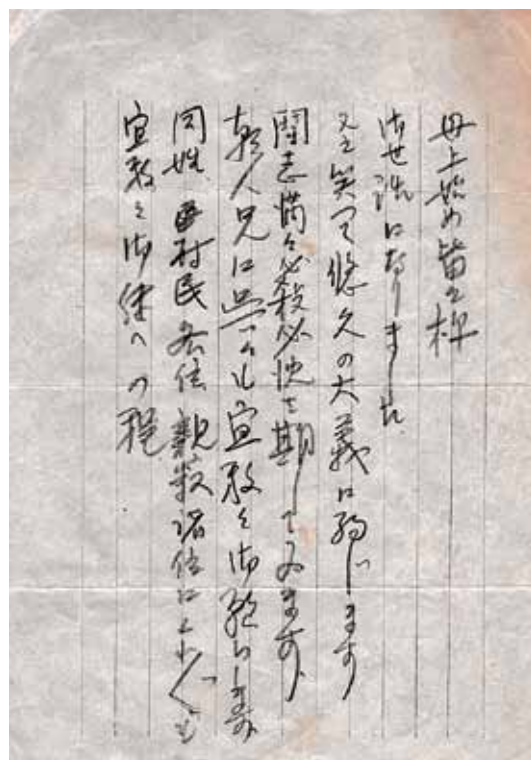
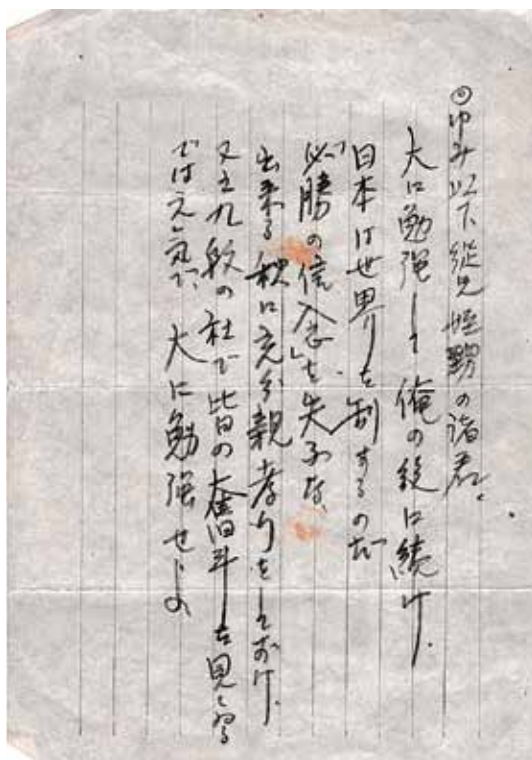
兄
上
様

桜花、ル、頃、即、めんとする、
居、還、る、日、上、に、必、伏、を、期、
同意、此、なる、の、あり、必、す、御、期、待、
に、候、は、ん、
母、上、福、子、姉、妹、に、新、吾、叔、父、叔、母、妹、に、宣、伝、
お、重、き、を、します、
兄、上、様

年の離れた兄新三郎は、又之が20歳の時に父が亡く
なったため、高等蚕糸から軍隊、戦死するまで、まさ
に父代わりであった。学生時代日記には、「・・・家
から書留、あけてびっくり、予定より二十円余計に
入ってゐた。中に文は短いが理解ある兄貴の手紙、一
層発奮。・・・」又之にとっては、頼もしく優しい兄
貴であり、新三郎にとって又之は可愛い弟であった。

出撃の前に書かれた 又之の遺書

右
母上始め皆様
左
◎ゆみ以下従兄
姪甥の諸君

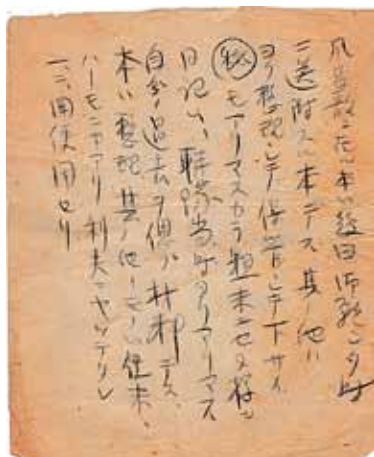


1944年（昭和19）秋、母てつは帰郷をした又之が部隊に戻る際に、「また来いよ」と声をかけると、「そんなこと言ったって……」。それが又之と母の最後の会話になってしまった。

母にとっては高齢で産んだ末っ子、よほど可愛かったのでしょう。母は、「このごうたれ戦争のために……」と、口ぐせのようにいていたそうです。

又之のメモ

この走り書きは出撃直前の3月に送られてきた荷物にはいていたもの。

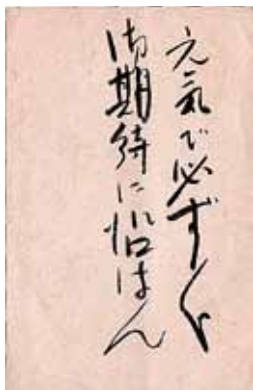


風呂敷に在る本は後日御願
した時に送付する本です。其の
他はよく整理して保管して下さ
い。◎もありますから粗末にせ
ぬ様に 日記は、連隊当時より
あります 自分の過去を偲ぶ材
料です、本は整理、其の他のも
のは仕末、ハーモニカあり、利
夫にやってくれ、一、二回使用
せり

利夫さんは父代わりであった兄新三郎の息子、甥である。当時4歳。利夫さんは、叔父又之さんの写真や書簡などをまとめて『特攻 第四十三振武隊 永遠の又之叔父』を2001年に刊行された。又之が、この世に生きた証しを永遠に残して欲しいという願いを、利夫さんがかなえたのである。



なお、ここに浅川又之をまとめるにあたり、資料を借用し書籍を参考にするとともに、浅川利夫さんには大変お世話になりました。

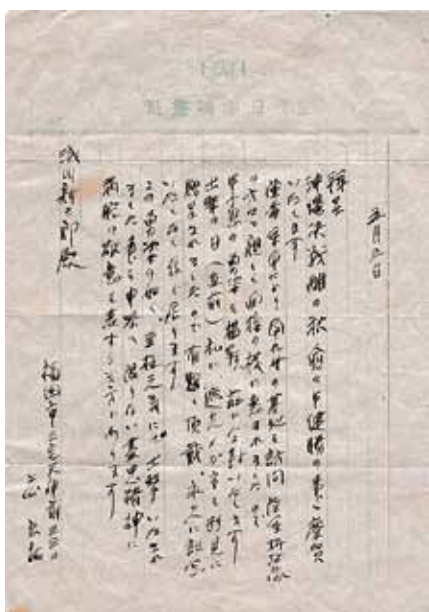


兄への手紙

出撃する知覧飛行場へ向かう途中、防府駅前松月旅館から、3月31日に出した二通の兄宛の手紙。一通（下）は「元気で必ず必ず、ご期待に沿わん」と絞り出すように書いている。この日に出撃の日が決まったか。



又之、一式戦闘機「隼」の前で
(1945年3月21日 三重県明野飛行場にて)
出撃の2週間前、特攻の訓練に明けくれている時期



出撃直前の特攻部隊（一番左が又之）と、カメラマンの手紙

取材に来ていた日本映画社のカメラマンの藤が撮影し実家に送ってきた写真と、そこに同封された手紙。
出撃の様子が、「この勇姿の如く、至極元気にて出撃いたされました」と記されている。

豊科高等女学校卒業の 女子挺身隊員 17歳11日で亡くなった 中島良子さん

中島さんとの出会い

「堀金村遺影集」の中に、気になる人物がいました。中島良子さんです。

1927年（昭和2）6月3日生

本籍地 堀金村

没年月日 昭和19年6月14日17歳

戦没場所 本籍地

位階勲等 勲八等白色桐葉章

軍歴 動員にて東洋バルブ株式会社
勤務中病死



女学校夏服の制服で（中央）

死亡時の年齢が17歳と11日、叙位・叙勲も受けていることから、戦争に関する仕事で東洋バルブ（上諏訪）に勤務している中、身体を悪くして、亡くなったことがわかります。

ご自宅がわかりましたので、伺ってお聞きしましたが、80年前のことで、諏訪の工場にいて亡くなったということは聞いているが、詳しいことはわからないということでした。

友の会の展示から

2023年（令和5）の博物館友の会戦時生活部の展示、「戦時中の豊科高等女学校女生徒の体験から」の中に、中島さんと同じ1927年（昭和2）生まれの生徒から次の内容の聞き取りがありました。

1944年（昭和19）3月卒業後に、挺身隊に加わるように指導があり、上諏訪の東洋バルブで働くことになった。旋盤工としてネジなどの部品を作った。1週間ごとに夜勤もあった。宿舍は、上諏訪駅前の湖月館、2～3人が一部屋で、食事はご飯と味噌汁程度であったが空腹で困ることはなかった。手当を貰い、配給のものを買った。良かったことは温泉が豊富でいつでも入浴ができ、洗濯もできたこと。



女子挺身隊員32名（東洋バルブ諏訪工場）
（『豊科高等学校六十年誌』より）

『豊科高等女学校六十年誌』

同窓会誌「六十年誌」を調べると、1944年（昭和19）3月に専攻科、本科の卒業生の中から農業・商家手伝いをのぞく32名が、女子挺身隊として東洋バルブ（上諏訪町）に動員されたことがわかりました。

女子挺身隊 浜 まつみ（高女一七回卒）の証言

女子挺身隊として、東洋バルブに向かい諏訪高女・諏訪家政・豊科高女の三つの女学校で入社式を実施し、第一・二工場に分かれて製品の検査を実施した。当初、旅館を寮としていたが、トラブルが多く、和泉寮という新しい寮に移った。途中から、賢い2人の寮母の先生を迎え、お茶などを学んだ。病気で休む者が何人もでて、自宅で静養していた中島さんが死亡した。「お葬式に参列し、泣かれる両親に何の言葉すら出ず香をたきお別れした」。1944年（昭和19）12月に大地震があり、潰れた工場の下から這い出る友の姿があった。また小野さんも入院、お母さんの願いもむなしく亡くなった。

『豊科高校創立100周年記念会員名簿 令和2年』

第18回（昭和19年3月卒業110名）の物故者の中に「中島良子」、さらにもう一人亡くなった小野さんか、「小野艶子」を確認。浜まつみさんは、旧制上条で、第19回卒業生の中に確認できたが、すでに亡くなっていました。

諏訪市立博物館に東洋バルブの戦時中の勤労働員についてお聞きしましたが情報はありませんでした。戦争時の東洋バルブの建物は、つい最近壊されてしまいましたが、調査し報告書が残ってます。諏訪二葉高校の「二葉百年のあゆみ」で、諏訪高女（現在の諏訪二葉高校）も東洋バルブに動員されていることを確認できました。

中島さんの同級生への聞き取り

「会員名簿」から中野良子さんと同期の同窓生を抽出し、安曇野市内在住の住所がわかる17人を選び、アンケートを実施しました。宛先が尋ねあたらないということで戻ってきたのが3通、亡くなって回答できないというのが2通、丁寧に記入してくださった返信が2通（UさんとSさん）でした。

Uさん（ ）内は息子さん

豊科高等女学校を4年で卒業後、そのまま女学校の同級生達と上諏訪にある東洋バルブの工場へ女子挺身隊の一員として行き、寮生活をしながら機械の製造を終戦までしていた。（本人は日頃物忘れも度々ですが、中島良子さんて知っているか？訪ねたところ、即座に）「知っているよ。女学校の同級生だ。一緒に挺身隊に行ったけど身体をこわして実家に帰ったが、亡くなってしまった……。」（小野艶子さんは？）「一緒に女子挺身隊で東洋バルブに行って働いたが、中島さんと同じで身体をこわし、たしか松本の実家に帰って行って亡くなってしまった。」



東洋バルブ「第八工場」1943年完成？
（諏訪市教育委員会 2013 『旧東洋バルブ諏訪工場調査報告書』より）

Sさん（娘さんが以前に聞いたこと）

諏訪に挺身隊として行っていたことを話してくれました。寮母さんがとても厳しくしっかりした方で、「諏訪には、諏訪の諏訪魂があります。安曇野の人間はのんびりしすぎ」と指導されたがよく話していました。勤務中に大地震があり、工場の入口が曲がってしまったというようなことを話していました。

戦場に向かう馬

軍馬は、華やかな騎兵ばかりではなく、物資の輸送、大砲類の牽引などに使われました。日中戦争以降、50万頭といわれる農耕馬が徴発され軍馬として大陸や南方の戦地へ送られました。ほぼ全ての馬が戦場で死亡したりして、再び日本の土を踏むことはありませんでした。

安曇野の人々にとって馬は、古くから農耕、運搬を始め人の暮らしに寄り添い、苦楽をともにする家族同然の存在でした。馬の無病息災を祈ったり、死んだ馬の供養をしたりするため、馬の頭を頂いた観音様の姿の馬頭観音や、文字で「馬頭観音」と刻んだ石碑が建立されました。昭和10年代に建てられた馬頭観音像も多く見られます。「出征 馬頭観世音 若葉号」、家の名前が刻まれた石碑があります。建てられたのは「昭和十二年十月十七日」、1937年、日中戦争が始まった頃、若葉号も「出征」したのではないのでしょうか。家族同然の馬との別れ、その悲しさが伝わってきます。



「出征馬頭観世音若葉号」
(穂高田中)



戦場に向かうための「徴馬」の風景
(堀金尋常小学校校庭 時期不明)

今回の企画展は、安曇野から戦争へ向かい、そして命を落とした人々を取り上げました。

特攻で命を失った二人の青年は、残された遺書から、先進的な考え方、そして家族思いの人柄が、伝わってきます。そして交わされた手紙などから残された家族の表現しようがないつらさ悲しさが、伝わってきます。なぜ人間を兵器とするような戦争に足を踏みこんでしまったのでしょうか。そんな時代、そんな社会が二度と来ないように、私たちは努力をしなければいけないと、心から思いました。

17歳の誕生日の11日後に亡くなった、豊科高等女学校を卒業したばかりの中島良子さん。少しでも彼女にせまろうとし、多くの協力を得て調査をしました。奇跡的にと表現していいのでしょうか、一緒に動員された方の証言を得ることができました。ただ、80年の長さを実感しています。(原明芳)

「ふるさと安曇野 きのう きょう あした No.31」

編集 安曇野市豊科郷土博物館

発行日 令和7年8月2日

安曇野市豊科郷土博物館 〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289-8

TEL: 0263-72-5672 / FAX: 0263-72-7772

URL: <https://www.city.azumino.nagano.jp/site/museum/>